

つてしまう。どんなことをしても、科学の研究を続けて、日本のために尽くしたいという決心はかたかった。それにしても、日本からのお金の仕送りしわくがなかったら、どうして、大学で勉強が続けられようか。もう絶体絶命ぜったいぜつめいだった。健次郎の困りはてているようすを見かねた、アメリカの友人が、

「山川、ぼくに金持ちのおばさんがいるよ。その人に君のことを頼んでみよう。君のような学問に熱心な人を、おばさんがだまっなて見逃のがすわけがない。きつといい返事がもらえるとと思うよ。」

健次郎は、それこそ『おぼれる者は藁わらをもつかむ』気持ちであつた。

「ありがとう。どうかよろしく頼む。」

友人を拜むかむような気持ちでそう言つた。二、三日して友人が、

「おばのバンドマン夫人が、君に会つてくれるそうだ。ぼくが案内するから、これからすぐに出かけよう。」